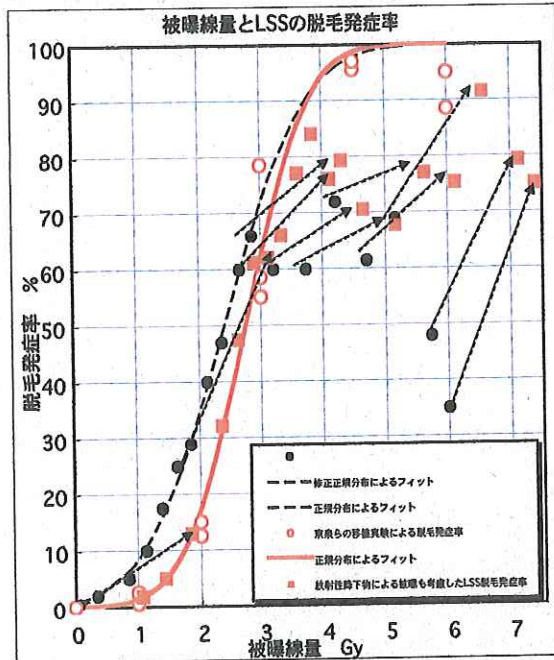
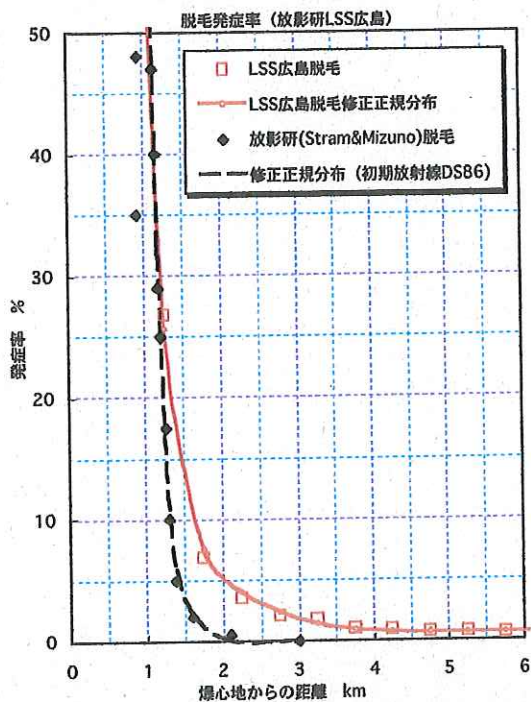


市民と科学者の内部被曝問題研究会発足に当たって 2012年1月27日

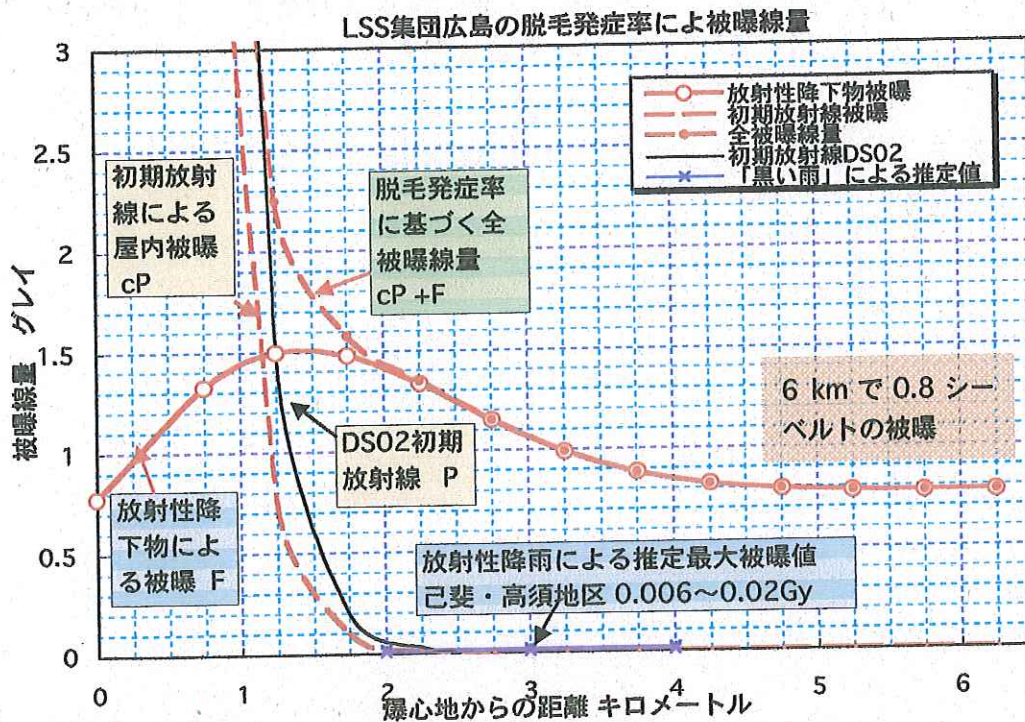
沢田昭二

放射線防護基準の基礎となる原爆被爆者の被曝実態を正しく捉える



被曝線量と脱毛発症率の関係

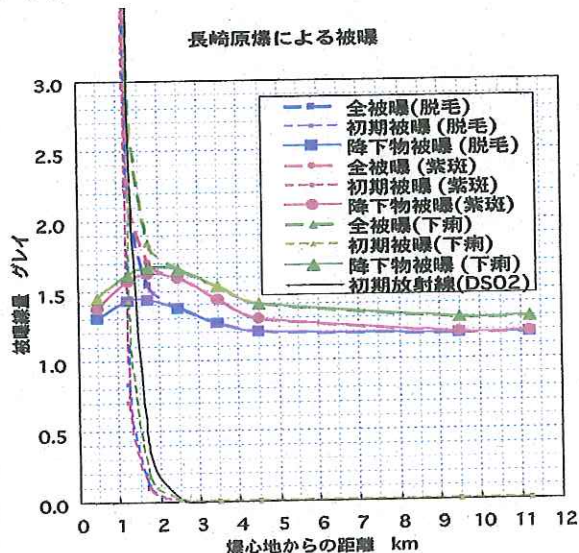
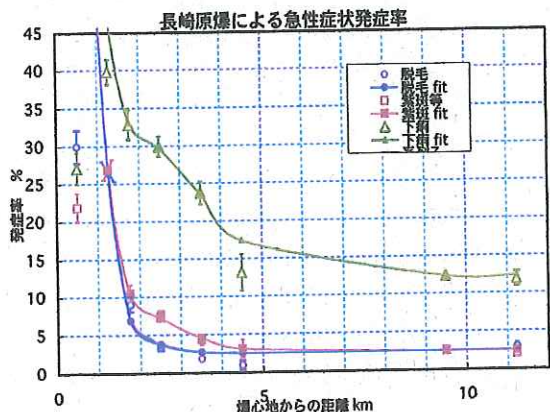
1950年前後のABCCの脱毛発症率調査



脱毛発症率から求めた広島原爆による被曝線量 (S.Sawada『社会医学研究』29(1)2011)

この放射性降下物の被曝影響 (主に内部被曝) を無視してきた。

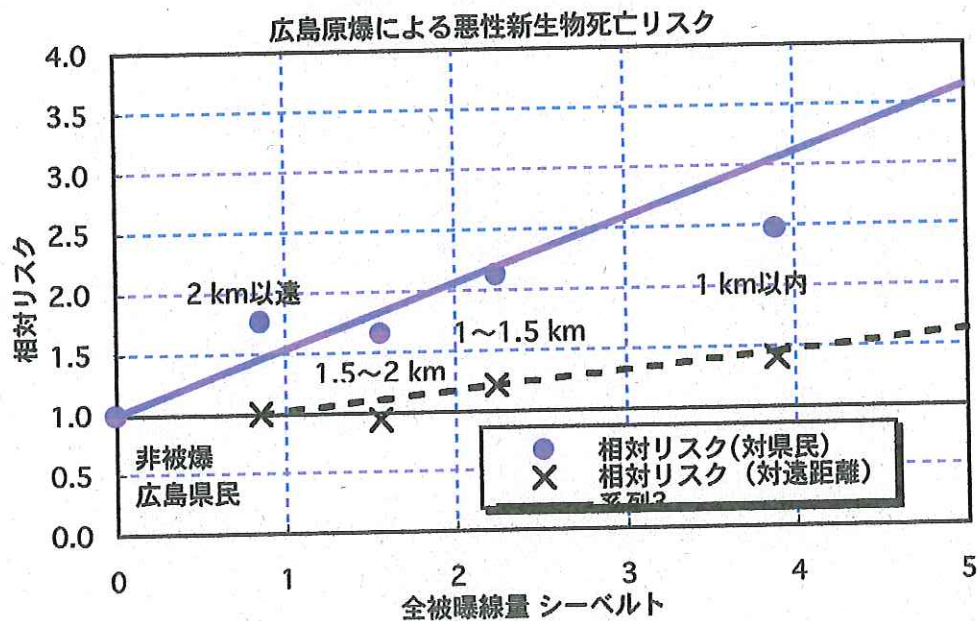
長崎医科大学と長崎市・県（1999年）の急性症状（脱毛、紫斑、下痢）発症率調査から長崎原爆による被曝影響を求める。



脱毛と紫斑の発症率はほぼ同じ振る舞い、△印の下痢発症率は近距離で小さく1 km 以遠は内部被曝で大きくなる。

爆心地から 12 km で 1.2~1.3 シーベルト（広島 の 1.5 倍）の被曝。

広島大学原爆医科学研究所の広島県在住被曝者の各種死亡率を広島県民の非被曝者と比較研究（原医研報告）の 1968 年~1972 年の悪性新生物による年間死亡率の相対リスクを脱毛発症率から求めた被曝線量で示した。



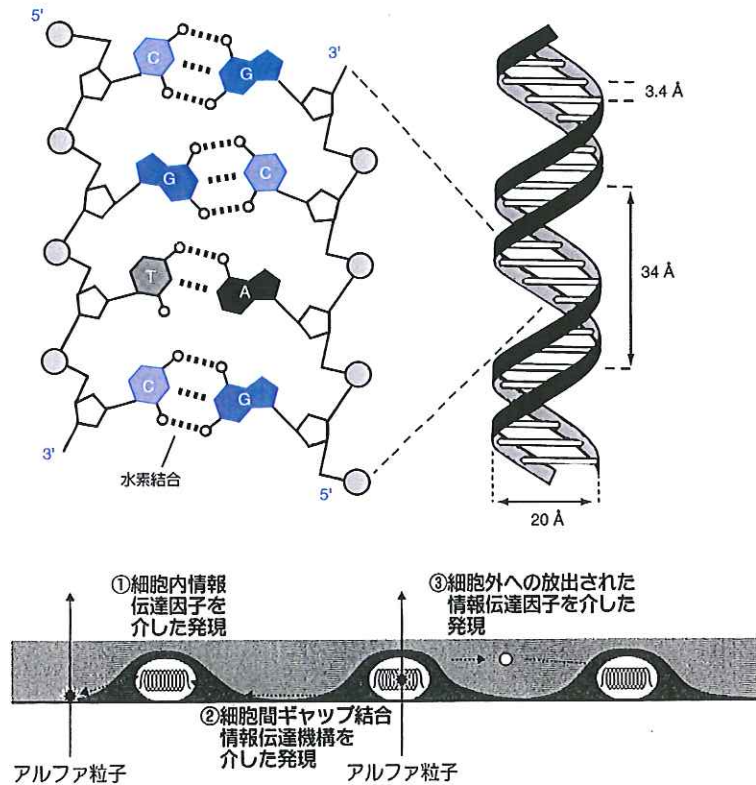
広島県民の非被曝者に対しては 1 シーベルトで相対リスクは 0.52 増加する。放射線影響研究所のように 2 km 以遠の被曝者を比較対象にすると、1 シーベルトで 0.15 の増加で 3.5 分の 1 近くの大幅な過小評価になる。

【参考資料】

「低線量」放射線内部被曝に健康障害

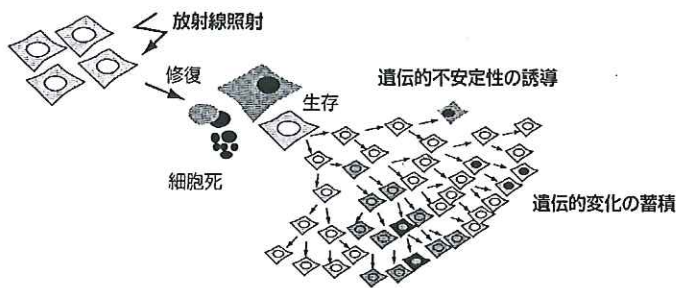
岐阜環境医学研究所 松井英介

「低線量」放射線内部被曝と健康障害のメカニズム



出所:佐渡敏彦、福島昭治、甲斐倫明編著「放射線および環境化学物質による発がん」
【第8章3 放射線の生物影響研究—最近の進歩】医療科学社、2005年より作成。

図 バイスタンダー効果の仕組み



出所:佐渡敏彦、福島昭治、甲斐倫明編著「放射線および環境化学物質による発がん」
【第8章3 放射線の生物影響研究—最近の進歩】医療科学社、2005年より作成。

図 遺伝的不安定性の誘導の仕組み

東電と日本政府のデータ隠しと不作為

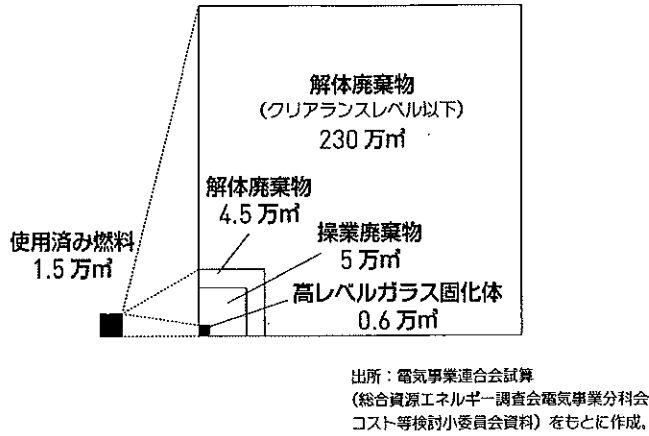


図3-3 六ヶ所再処理工場で処理される使用済み燃料と廃棄物の量の比較

	ウクライナ 2006年		ベラルーシ 2006年		日本 2011年	
	セシウム137	ストロンチウム90	セシウム137	ストロンチウム90	セシウム137	ストロンチウム90
飲料水	2	2	10	0.37	200→10	-
牛乳	100	20	100	3.7	200→50	-
粉ミルク	500	100	100	-	500→50	-
乳幼児食品	40	5	37	1.85	- 50	-
米	-	-	-	-	500	-
パン	20	5	40	3.7	500	-
じゃがいも	60	20	80	3.7	500	-
野菜	40	20	100	-	500	200
果物	70	10	40	-	500	-
肉・肉製品	200	20	-	-	500	-
魚・魚製品	150	35	-	-	500	-
卵	100	30	-	-	500	-
キノコ(生)	500	50	370	-	500	-

